

●那須の細道 ①二宿の地 ②殺生石 ③遊行柳 ●関の細道 ①境の明神 ②白河の関 ③這分明神

## 白河関跡の発掘調査

■ 昭和34年から38年の調査地区  
■ 平成7年・10年の調査地区

白河神社前の看板から抜粋しました。発掘調査の記録です。



上空から見た関跡



B地区の調査



C地区の調査



A地区の調査



出土した墨書土器

「白河関跡蹟 (関の森遺跡)」の発掘調査は、この地方古代の白河関跡であることを実証することを目的として実施されたものです。昭和34年から54年にわたり、遺跡を大ききA・B・C地区と分けて行われた調査では、各地点から多くの遺構・遺物の存在が明らかとなりました。

**A地区**・空堀と土墨に囲まれた平坦地を中心に調査が行われ、掘立柱建物跡、奈良・平安時代頃の土器が出土しました。

**B地区**・白河神社の社殿裏側の平坦地を中心に調査が行われ、竪穴住居跡、鍛冶跡、柵列が確認されました。遺物は墨書土器や鉄製品が多く発見されています。

**C地区**・遺跡の北側斜面を中心に調査が行われ、柵列跡、門跡の可能性が考えられる柱穴が確認されています。

この54年にわたる調査において発見された遺構・遺物の特徴や遺跡の立地条件などを総合的に考察した結果、この地が古代関跡の条件にかなうことが明らかにされ、昭和44年に「白河関跡」として、国の史跡に指定されました。

### 説明看板

### 国指定史跡白河関跡

白河関は、古くよりみちのくの関門として歴史にその名を刻み、また文学の世界では歌枕として数多くの古歌に詠まれた場所である。関の位置については久しく不明であったが、江戸時代後期、時の白河藩主松平定信の考証により、この地が白河関跡であると断定され、寛政十二年(一八〇〇)に「古関蹟」の碑が建てられ、今日に至っている。関が置かれた年代については不明であるが、延暦十八年(七九九)、の太政官符には「白河？」の名が認められることや歴史的な背景からみて九九(承和二年(八五))、大化の改新以後の七・八世紀頃には存在していたものと考えられる。昭和十四年から三十八年までに実施された発掘調査では、竪穴住居跡や掘立柱建物跡、空堀、土墨、柵列などの中世にいたる遺構が発見され、縄文土器、土師器・須恵器、灰釉陶器、鉄製品などの古代から中世にいたる遺物が出土している。出土した土師器の中には、門、大室、舟など墨書土器が見られる。白河関の全体像についてはまだ未解明な点もあるが、現在も奥州 関の一つとして多くの人々に親しまれ、歴史のひとつにふれることができる場となっている。また、春には藤やかたくりの花が咲き、訪れる人々の心を和ませている。文部科学省 白河市教育委員会